# 江島為信の儒学と兵学

## ―『古今軍理問答』の「理」―

奥井康方

## 一

近世初期に刊行された教訓書『身の鏡』・『理非鑑』の作者として江島為信の名は現在広く知られる。その生涯の事跡については、つとに松田修氏が「日州漂泊野人の生涯」[注1]としてまとめられており、近年でも下坂憲子氏が江島家伝来の資料をふまえて新たな成果を発表されているが[注2]、ここで改めて確認しておきたい。作家・作品研究の原点である伝記事実と今までの研究を照らし合わせ、本稿で検討するべき問題を見極めることが目的である。以下に為信の経歴を簡略に記す。

通称長左衛門。号山水、松風軒。寛永十二年生、元禄八年十月八日没、享年六十一歳。日向飫肥藩清武の武家出身で、太田道灌持資流の兵学者[注3]。明暦元年に郷里を離れて、京や大坂・江戸を転々とするなかで、『身の鏡』（万治二年刊）・『理非鑑』（寛文四年刊）や、軍書『古今軍理問答』（同五年刊）・『闕疑兵庫記』（同七年刊）などを執筆した。寛文八年に伊予今治藩へ仕官し、馬廻り役から次第に昇進して、最晩年の元禄四年には藩老となるに至った。延宝期には江戸留守居役を務めるかたわら俳諧に遊び、西山宗因の批点を得て『十百韻山水独吟権翁批判』（延宝七年跋、以下『山水十百韻』）を上梓したほか、西鶴・惟中らとも交流を持った。

従来の研究では専ら教訓書の二作に関心が集まってきたが、右の略歴から知られるように、為信は教訓書に限らず軍書や俳諧などの多方面において著作を遺している。この著述家を総合的にとらえるなら、当然その軍書や俳諧にも目を向けていかなければならない。就中兵学者としての本領に直結する軍書には、相応の注意が払われるべきである。

為信本人の思想については早くから儒学の影響が指摘されているが、その指摘もやはり教訓書ばかりをふまえたものである[注4]。確かに

『理非鑑』では四書に則った教訓が大半を占めており、[注5]儒学からある程度の影響を受けていたと考えられる。しかし教訓書という限定された範囲からどれだけ儒学の痕跡を拾い集めたところで、多岐にわたる著作の各々に映し出されている為信の思想を包括的に説明することはできない。また儒学が当人においてどのような意義を持っていたのかも今ひとつ明確にならないと思われる。他の著作を参照し、根本的な思想の枠組みから問い直すことが必要なのである。

そこで本稿では、『古今軍理問答』[注6]を主な検討対象とし、作品を支えている為信の思想に考察を加える。この作品では為信が軍事を論じているのだが、記述中に度々用いられている「理」[注7]という語が、為信の発想の有様を示唆しているように思われる。まず作品の性格を吟味して、そこに「理」がどのように位置付けられているのかを確認し、「理」の内実に迫っていく。

## 二

全七巻七十三章にわたる『古今軍理問答』（以下『軍理問答』）は、いわゆる軍記評判の系譜に属する作品で、『保元物語』を始めとする諸種の軍記物から合戦記事を取り上げ、両軍の得失を問答形式で論評したものである。本作品の内容を検討する前に、ここで作品の全体像を概観し、検討上留意するべき記述の形式を確認しておく。

本作品の概要は、巻頭に置かれた「凡例」にほぼ集約されている。

凡例

一、凡古今軍理問答は、保元・平治・平家物語・太平記・甲陽軍鑑に記す所の合戦の内けやけきもの記レ之。

一、凡合戦の評、本文を記し、その後へに管見を加へ、兵書をまじへひきて質レ之。

一、凡本文繁多の所は合戦の大意をとり、文章の花麗、戦士の名字は略レ之。

一、凡諸書の評判は、本文に記ざる事をも鑿空して載レ之。此書のごときは他を求めず、本文を宗として評レ之。

一、凡太平記評判に此書を比するに、理において戻る所多し。たとへば此書には、楠の言行、謀の品々、始に金言を吐ても、終に衆愚に同じたる所は楠の非にして記レ之。衆愚の諤々たるは用るにたらざればなり。赤坂の城軍、用水の論、平野将監が降参の評、楠戦死のごとき、其外瀾漫なりといへども一二をあげて例レ之。

第一条から第三条にあるように、『軍理問答』の各章には最初に軍記物の合戦記事の本文もしくは要約が載せられており、その後に為信による「合戦の評」が記されている。各章における合戦記事の出典については、全巻にわたって調査した結果を［表］にまとめた。大略は第一条に書目があげられるとおりで、[注8]時代順に沿って配列されており、全巻を通読すれば平安から戦国末までの合戦史をひ

# 「表」各章における合戦記事の出典

| 巻 | 章 | 「或問」を除く章頭八字 | 合戦記事の出典 | | 合戦記事の主な登場人物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | ① | 倭朝往古より近代 | 保元物語 | 上 | 源為義 |
| | ② | 保元の比主上上皇 | 保元物語 | 下 | 源為朝・源義朝 |
| | ③ | 平治の比信頼義朝 | 平治物語 | 中 | 源義朝・源義憑・藤原信頼・平重盛 |
| | ④ | 義朝父子本陣内裏 | 〃 | 〃 | 源義朝・源義憑・鎌田政家 |
| | ⑤ | 源三位頼政高倉の | 平家物語 | 4 | 源頼政・源仲綱・渡辺競・平宗盛 |
| | ⑥ | 競三井寺へ馳参り | 〃 | 〃 | 源頼政・源仲綱・一如房 |
| | ⑦ | 高倉の宮南都へ落 | 〃 | 4 | 高倉の宮・源仲綱・平知盛・田原忠綱 |
| | ⑧ | 右兵衛佐頼朝文学 | 源平盛衰記 | 20 | 源頼朝・佐那田義員・大場景親・俣野景尚 |
| | ① | 右兵衛佐頼朝謀叛 | 平家物語 | 5 | 源頼朝・平維盛・斉藤実盛 |
| | ② | 富士川にて平家敗 | 〃 | 6 | 源行家・源義円・平知盛・平清経 |
| | ③ | 水鳥の合戦に源氏 | 〃 | 6 | 木曾義仲・井上光盛・城長茂 |
| | ④ | 木曾義仲東山北陸 | 〃 | 6 | 木曾義仲・斎藤実盛・平通盛 |
| | ⑤ | 源氏火燧が城を破 | 〃 | 7 | 木曾義仲・斎明・平維盛・平通盛 |
| | ⑥ | 平家都をば木曾義 | 〃 | 8 | 木曾義仲・矢田義清・平知盛・平教経 |
| | ⑦ | 水鳥の合戦に源氏 | 〃 | 8 | 木曾義仲・源行家・平知盛・平重衡 |
| | ⑧ | 木曾義仲院参して | 〃 | 9 | 木曾義仲・源頼朝・源範頼・源義経 |
| | ⑨ | 熊谷平山一の谷揺 | 〃 | 9 | 熊谷直実・平山季重 |
| | ⑩ | 一の谷の大手生田 | 〃 | 9 | 河原高直・河原盛直・梶原景時 |
| | ⑪ | 平家一の谷にこも | 〃 | 9 | 源義経・武蔵坊弁慶・佐原義連 |
| | ⑫ | 平家一谷を退散し | 〃 | 11 | 源義経・梶原景時・桜間助能遠 |
| | ⑬ | 源氏勝にのり馬の | 〃 | 11 | 源義経・伊勢義盛・平教経 |
| | ① | 元弘の比後醍醐の | 太平記 | 3 | 陶山義高・小見山某 |
| | ② | 楠兵衛正成勅命を | 〃 | 3 | 楠正成・楠正氏・和田正遠 |
| | ③ | 主上笠置を御没落 | 〃 | 4 | 児島高徳・千葉介貞胤・小山秀朝・佐々木道誉 |
| | ④ | 楠正成は赤坂の城 | 〃 | 4 | 楠正成・隅田通治・斎藤通貞・宇都宮公綱 |
| | ⑤ | 京都の勢八十万騎 | 〃 | 6 | 楠正成・平野将監・阿曾時治 |
| | ⑥ | 二階堂出羽の入道 | 〃 | 7 | 大塔の宮・村上義輝・二階堂道蘊 |
| | ⑦ | 楠桙籠りたる千剣 | 〃 | 7 | 楠正成・名越越前守 |
| | ⑧ | 先帝船上に着御な | 〃 | 8 | 赤松円心・赤松則祐・佐々木時信 |
| | ⑨ | 赤松にぐるてきを | 〃 | 8 | 赤松円心・赤松則祐・隅田通治・高橋通宣 |
| | ⑩ | 先帝船上に御座有 | 〃 | 9 | 足利高氏・名越高家 |
| | ① | 新田小太郎義貞先 | 太平記 | 10 | 新田義貞・桜田貞国・足利慧性 |
| | ② | 義貞朝臣分陪の合 | 〃 | 10 | 新田義貞・三浦義勝 |
| | ③ | 京都鎌倉は高氏義 | 〃 | 11 | 菊池秩阿・小弐妙慧・大佯具簡・北条英時 |
| | ④ | 足利尊氏相模次郎 | 〃 | 14 | 新田義貞・脇屋義助・足利尊氏・足利直義 |
| | ⑤ | 鎌倉には尊氏の勢 | 〃 | 14 | 尊良親王・脇屋義助・足利尊氏・足利直義 |
| 四 | ⑥ | 義貞兄弟箱根竹の | 太平記 | 15 | 新田義貞・脇屋義助・北畠顕家・足利尊氏・細川定禅 |
| | ⑦ | 義貞東坂本へ引か | 〃 | 15 | 新田義貞・楠正成・足利尊氏 |
| | ⑧ | 尊氏丹州より摂州 | 〃 | 15 | 新田義貞・楠正成・足利尊氏・足利直義 |
| | ⑨ | 尊氏筑前へ没落し | 〃 | 16 | 新田義貞・脇屋義助・赤松円心 |
| | ⑩ | 義貞は尊氏追罰の | 〃 | 16 | 楠正成・楠正季・足利尊氏・足利直義 |
| | ⑪ | 楠すでに討れけれ | 〃 | 16 | 新田義貞・小山田高家・足利尊氏 |
| | ① | 義貞兵庫を引退て | 太平記 | 17 | 新田義貞・足利尊氏 |
| | ② | 寄手山門より追立 | 〃 | 17 | 新田義貞・足利尊氏 |
| | ③ | 官軍両度の軍に打 | 〃 | 17 | 新田義貞・名和長年・足利尊氏 |
| | ④ | 四方の相図相違し | 〃 | 17 | 後醍醐天皇・新田義貞・足利尊氏 |
| | ⑤ | 義貞北国へ下りた | 〃 | 18 | 瓜生保・高師泰 |
| | ⑥ | 金崎の城には瓜生 | 〃 | 19 | 尊良親王・新田義顕・足利高経・高師泰 |
| | ⑦ | 新田義貞兄弟金崎 | 〃 | 19 | 新田義貞・脇屋義助・足利高経 |
| | ⑧ | 新田左中将義貞越 | 〃 | 20 | 新田義貞・中野藤内左衛門・足利高経 |
| | ⑨ | 楠帯刀正行は父正 | 〃 | 25 | 楠正行・細川顕氏 |
| | ⑩ | 藤井寺の合戦に細 | 〃 | 25 | 楠正行・山名時氏・細川顕氏 |
| | ⑪ | 楠両度の合戦に打 | 〃 | 26 | 楠正行・楠正時・高師直・高師泰 |
| | ① | 故新田義貞の次男 | 太平記 | 31 | 石堂義房・石堂頼房 |
| | ② | 三浦が合図相違し | 〃 | 31 | 新田義宗・新田義興・脇屋義治・足利尊氏 |
| | ③ | 新田武蔵守は石浜 | 〃 | 31 | 新田義宗・新田義興・脇屋義治・足利尊氏 |
| | ④ | 新田義宗・和田正武 | 〃 | 34 | 楠正儀・和田正武・足利義詮・細川清氏・赤松範実 |
| | ⑤ | 今川上総守佐々木 | 〃 | 34 | 和田正武・結城駿河守・細川清氏 |
| | ⑥ | 九州には征西将軍 | 〃 | 36 | 菊池武光・大佯氏時・小弐頼尚 |
| | ⑦ | 摂津国は赤松信濃 | 〃 | 36 | 楠正儀・和田正武・佐々木道誉・吉田厳覚 |
| | ⑧ | 細川相模守清氏四 | 〃 | 38 | 細川清氏・細川頼之 |
| 七 | ① | 甲州武田信玄十六 | 甲陽軍鑑 | 3 | 武田信虎・武田晴信・平賀源心 |
| | ② | 村上義清の持信州 | 〃 | 25 | 武田晴信・山本勘助・村上義清 |
| | ③ | 武州野州にて上杉 | 〃 | 26 | 武田晴信・板垣信形 |
| | ④ | 武田晴信の家臣真 | 〃 | 27 | 真田幸隆・洲原物左衛門・村上義清 |
| | ⑤ | 武田晴信信州さく | 〃 | 27 | 武田晴信・板垣信形・村上義清 |
| | ⑥ | 信州川中島より飛 | 〃 | 32 | 武田信玄・上杉謙信 |
| | ⑦ | 相州北条氏康より | 〃 | 32 | 武田信玄・北条氏康・上杉謙信 |
| | ⑧ | 甲州武田勝頼の襲 | 〃 | 51 | 武田勝頼・徳川家康 |
| | ⑨ | 武田四郎勝頼遠州 | 〃 | 52 | 武田勝頼・馬場信房・織田信長・徳川家康 |
| | ⑩ | 武田勝頼悪道無道 | 〃 | 57 | 武田勝頼・武田信勝・土屋惣蔵 |
| | ⑪ | 古今戦闘の得失聞 | なし | | なし |
| | ⑫ | 和朝の兵家者流有 | なし | | なし |

ととおりたどれるようになっている。そしてその一々の合戦記事に、為信の思想を反映した「合戦の評」が添えられているというわけである。当面の課題は、その「合戦の評」の詳細な内容検討である。なお［表］では各章に対して巻ごとに通し番号を付したが、以下その番号をもって引用する記述の所在を示す。

また第四条以下には、本作品に先んじて刊行された軍記評判との相違点が述べられている。特に第五条は、当代に莫大な影響を及ぼしたことが知られる『太平記評判秘伝理尽鈔』（正保二年刊）に対して、為信がかなりの対抗意識を持っていたことを窺わせる。軍記評判の系譜に『軍理問答』を正確に位置づけるためには、それらの先行作品との比較考察が不可欠といえる。しかし先に述べたように本稿では為信個人の思想に主眼を置いているため、今回は問題点の指摘にとどめ、先行作品との比較は別の機会に譲る。

さて全章の「合戦の評」は問答体の形式で記されている。例として巻一①を次にあげる。合戦記事の引用部分に傍線を付す。

或問「倭朝往古より近代にいたるまで国々所々にての合戦其幾と云事をしらず。普く人口にとゞまる所の合戦をあげて理非得失を質さん。先六条の判官為義十八歳の時、南都の衆徒朝家をうらみ奉る事ありて、数万騎にて都へ責上るよし聞えしかば、為義罷向て逆徒討戮つかまつれと勅命を蒙り、俄の事なれば折ふし無勢にて、僅に主従十七騎栗栖山に馳むかひ、敵の体を見れば、山野道路にいたるまで稲麻竹葦のごとく尺地ものこらず充満たり。…此合戦、大衆は大勢は多勢、為義僅に十七騎、髪の毛を一筋づゝ分て取とも猶不足ならん。古へより今にいたるまで、小勢にて大敵を亡すためし多しといへども、或城に引籠り、地の利を以て勝を取。為義栗栖山の合戦は、平場と云、小勢と云、大将いまだ若く、此三失を以て勝をとる事更に心得がたし。為義を始め十七騎大剛勇力にて勝たるか、時の運によりたるや。」

答て云「十七騎兵金石の身なりとも、運にまかせて方便もなく数万の敵に打あふては勝事を得がたし。為義栗栖山の合戦は、孫呉良平の心にも叶ひたる謀なるゆへに勝事を得たり。第一はまた大衆の智謀なかりしゆへによつて也。」…

このように全ての章は「或」の問いで始まる。「或問」以下には合戦記事の引用とそれに関わる疑問や質問が組み入れられ[注10]、その質疑に対する返答が「答て云」以下に述べられている。「合戦の評」における為信の論述は、「或」の質疑と「答て云」以下の二つの部分から成り立っているのである。「或」の質疑が合戦記事からその合戦の要点を汲み出して問題設定をする働きをし、「答て云」以下に本論が展開され結論が提示される仕掛けと見なされる。次節以降では「答て云」以下の内容を中心に検討していくが、「或」の質疑も必要に応じて参照することにする[注11]。

## 三

さて「合戦の評」の内容に立ち入って為信の思想を追究していくにあたり、まず為信の合戦に対するごく基本的な考え方についてまとめておきたい。それが『軍理問答』全巻の「評」の方向性を示していると考えられるからである。ここでは個々の合戦に対する具体的な言及は極力避け、あらゆる合戦を総括する記述に注目する。以下に、合戦における普遍的な法則「合戦の道」を説いている例を全て拾い上げる。

○合戦の道、あながちに勢の多少によらず。只大将の賢愚得失によれり。[巻一①]

○義朝理を背し事一ならず。…合戦の道、時の運によるといへども、小固不レ可レ敵レ大といへり。小勢を以て要害の構もなく大敵と平場において防戦をとげし事。[巻一③]

○合戦の道、必(しも)勢の多少にはよらず。此石橋山の合戦は、頼朝の行理にあたらず。[巻一⑧]

○合戦の道、小は大に敵すべからずといへども、良将なれば、小勢たりといへども勝利なくんばあるべからず。[巻四⑤]

二番目の例を除く他の三例については、合戦の勝敗を分ける要因として、双方の軍勢の数よりも大将の良否という点に優位を置いていることが直ちに了解される。三番目の例は源頼朝という具体的な大将の名をあげ、その「行」計略が何よりの敗因と断じているのである。また二番目の例にしても、「合戦の道」以下の一文では軍勢の多寡が勝敗に関わることを強調しているが、その前後を見れば、大将源義朝が用いた計略に対する批判の一環だったことが知られる。つまり右の四例が示しているのは、為信が合戦の勝敗の原因を専ら大将に求めていたということである。他にも「平場の合戦にてさへ大将の方便により勝利を得るは常のならひ」(巻一⑦)・「とにもかくにも大将拙きがゆへに敗北に及べり」(巻五⑩)などの類例をあげることができ、更には「合戦の勝負、士卒の剛臆は大将によりて有物なれば」(巻四④)・「士卒の剛臆は大将によれり」(巻六⑦)のように士卒の士気も大将に懸かっているとする例が見られ、為信は勝敗に関わる多くの事柄を大将と絡めて考えていたといえる。

総じて為信は、合戦の勝負と神仏や朝廷の加護などとを結び付けることはしなかった。例えば、比叡山に立て籠った新田義貞と足利尊氏との合戦をめぐる問答において、尊氏が敗れたのは医王山王に向かって弓矢を引いたためかとの問いに対し、「山王の擁護によりて合戦の勝負を見る事おろかなり。…尊氏敗軍の事は将の謀拙きによれり。山王の御とがめにはあらず」(巻五①)と返答している。山王権現の勝敗への関与を強く否定するとともに、大将たる尊氏の計略の稚拙さが敗因であると主張しているのである[注12]。また為信は、時の運が勝敗を左右する場合のあることは認めているものの、それ

だけで簡単に片付けることはしなかった。「源氏運をひらくべき時節到来すといへども、一は平家の君臣浅智短慮のいたり也」（巻二①）・「天運時いたらずとは云ながら、一はまた大将の智謀不明の故ならん」（巻六③）というように、時の運が一方に味方してしまった合戦でも、ひとまずは「浅智短慮」・「智謀不明」といった大将本人の器量に勝因や敗因を見出そうとしている。合戦の勝負を大将の計略ひいては器量に帰する考え方は、どんな合戦を目の前にしても徹底して貫かれているのである。

為信が合戦を論じる際に最も重要視したのは、一軍の頂点に立つ大将であった。『軍理問答』全巻の「合戦の評」は、概ね大将またはそれに準ずる人物に対して論評を加えたものと見てよい[注13]。為信は、各々の合戦に即して計略の良し悪しを問うとともに、根元的な大将の器量の問題にも間々言及している。以下、大将に対する論評の諸相を追っていくなかで、為信の思想を窺うことにする。

## 四

為信はどのような大将を高く評価したのだろうか。また如何なる評価基準を持っていたのか。まず軍中の大将の役割を確認する。

「呉起臨レ戦、左右進レ剣。起曰、将専主二旗鼓一爾、一剣之任非二将事一也」（尉繚司）といへり。大将たる者は、士卒の命を司て麾を取て人数を下知し、一進一退法度有て全く勝をとるをこそ良将と云なれ。［巻六⑧］

大将は、自ら武器を持って直接戦闘に加わるのではなく、計略をめぐらし采配を揮って、実際に戦闘に従事する士卒に指示を与え、確実に勝利へと導く大任を負うという。指揮に従って手足のように働く士卒の役割[注14]との間には明確な差が設けられ、自軍の行動を逐一決定する頭脳としての格別の役目が割り当てられていたのである[注15]。

その役割からおのずと評価のあり方が定まってくる。右に引用した記述に続き、為信は次のように述べている。

其身武勇に達したるとても、一人にて始終の勝いかであらんや。相州（細川清氏）智謀有大将ならば、右馬頭（細川頼之）押よせ戦ふとも城を持かため、西長尾へさしむけたる味方の後詰の時節を待て前後より合戦せば、右馬頭滅亡疑なし。「凡論レ将勇之於レ将乃数分之一耳」（呉子）と先哲の云けんは、又むべならずや。

一軍の頭脳となる大将にまず求められていたのは、「武勇」ではなく「智謀」の徳が器量に備わっていることであった。「智謀有大将ならば」との条件が付いてこそ、「右馬頭押よせ戦ふとも城を持かため」以下、細川清氏の計略について云々することが成り立つ。大将が「智謀」の徳を持っているかどうかは、計略の良し悪し以前の問題と考えられていた。細川清氏の持つ「武勇」は、「智謀」の対極にあるものとして批判されているのである。

「智謀」を称揚し、「武勇」を非難する為信の姿勢は、他の章においても同様である。次に、木曾義仲が構えた火燧城の落城に関わり義仲の「器」に言及している巻二④を掲げる。

或問「…木曾方にも謀の品により勝利になるべき理もありや。」答て云「柵を破られ威儀師に後矢射られて後は、孫呉黄石公を籠たりとも軍を全する事を得がたし。先木曾義仲将の器のかけたる所多し。大将たる人は『智信仁勇厳』（孫子）の五徳を以てよしとす。先五徳の内智において短し。智有大将は、志を衆に通じて人情をよく察し、其上にて軍伍をいたす事なるに、木曾は剛勇ばかりを表にして、威儀師が心曲をはからざるが故に手飼の犬にくはるゝがごとし。…」

火燧城は、斎明威儀師の謀叛によって、堀の水を堰き止めていた柵を壊されて落城したのであるが、為信はそもそもの原因が義仲の器量にあったと述べている。謀叛を企てた斎明威儀師の心中に思い至らなかったことを難じ、その問題を、「智」が不足し、「剛勇」ばかりが目立つ義仲の器量の欠陥に還元しているのである。もっとも「智」と「剛勇」とは、『孫子』の「智信仁勇厳」から取り出されたもので、『孫子』では五徳のうちの二つに過ぎない。しかし『軍理問答』においては、大将に必要なものとしての「智」・「智慮」・「智略」・「智謀」や、「浅智」・「智将」などの用例が散見され、また否定の言辞を伴う「勇」・「武勇」・「剛勇」・「勇力」・「勇強」・「勇気」・「勇将」が数多く見られるのに比し、「信」について述べられることは無く、「仁」と「厳」はそれぞれ一章で述べられるにとどまることから、為信の大将評価は「智」を柱石とし、「勇」を指弾の的としていたと考えられる。

義仲や細川清氏の例に見られるように、「智」と「勇」とはしばしば対比され、「勇」は批判されている。菊池武光も「菊池やゝもすれば敵を侮り、小勢を以て平場に陣す。是大なる武勇の病也。…若智将にあはば忽軍利を失ふべし」（巻六⑥）と批判されている。為信は「智」を重視する一方、「勇」は殆んど評価の対象とせず、むしろ根元的な器量の欠陥として考えていたのである。

大将の器量に対する批判、特に「勇」に対する批判について掘り下げて考えていく。次に、壇の浦での源義経の活躍を評した箇所を掲げる。

或問「…義経の弓を取かへされしは、理にあたれりやいなや。」答て云「義経弓を取落して敵船近く乗込弓を取かへされし事、暴虎馮河の勇、是君子の所レ悪、将の器にあらず。怯弱の弓を敵の取伝へたりとも何の害かあらん。弓のよはきを恥るは胯下の小辱也。漢の大功をなすこそ本意ならめ。もし義経を目がけて、敵鏃をそろへ精兵に射させなば、義経匹夫の鏃にあたり命をおとされん事眼前也。しからば源氏勝利をうしなはん事必せり。こゝを以見れば、怯弱の弓を敵の取伝へたる恥と、

義経討死して源氏勝利を失ふとは、いづれか是いづれ非なるや。義経の不義言葉にものべがたし。」…［巻二⑬］

海の中へ弓を落とした義経は、その弓が小さく弱々しいのを敵に見られることを恥じ、敵の舟に近寄ってまで弓を拾い上げるという勇猛さを見せたのだが、為信は義経の行為を「暴虎馮河の勇」命の危険を省みず血気にはやる「勇」とし、義経は「将の器」ではないと批判している。先述のとおり、為信にとって大将は合戦の勝敗を握る存在である。大将一人の死はそのまま全軍の敗北を意味した。大将は命を全うして勝利を収めることを第一の目的としなければならない。その大切な役目を忘れて危険に身を投じることを、為信は非難していると考えられる。ここで特に注意しておきたいのは、「義経の弓を取かへされしは理にあたれりや」、「義経の不義言葉にものべがたし」と、「理」・「義」という語が使用されていることである。そして「理」・「義」が説明されるときに「暴虎馮河」という言葉が使われていることも注意が必要である。「暴虎馮河」は、いうまでもなく孔子が子路に語った言葉（『論語』述而編）に由来し、下に続く「是君子の所レ悪」は孔子のことを指しているが、この言葉は、義経以外にも赤松則祐（巻三⑨）や新田義貞（巻五③）に対して、その「勇」を批判する際に用いられており、為信が「勇」を戒めるために常に用意していた言葉と考えられるのである。[注20]

もうひとつ例をあげる。新田義貞の北国における合戦と戦死について論評した巻五⑧である。

或問「…義貞北国の合戦の次第、戦死の事、天運時いたらざるか。又定行の期する所か。」

答て云「…又義貞戦死の事、定業にあらず。非業の死也。定業と云は、理を尽し、天理にかなひ、死をいたすを定業とす。理を背き死するを非業とす。義貞の死は非業也。義貞理を背れし事一ならず。京都へ上らず、北国へ留滞せられし事一。高経(足利高経)七の城をかまへ、敵責る時後を取切ごとく拵へ、こもりゐるを見ながら、藤島の城の色めくを見て万方をさし置、惣勢藤島にむかひ、敵後をさへぎらん事眼前なるに、名将わづかの小勢にて遠慮なくせめぐちへむかはれし事一。中野藤内左衛門が『千釣弩為二鼷鼠一不レ発レ機』と諫しを用ひず、天下の安否を身にかけたる武将の身として死をかろんぜられし事一。此三失は義者の所レ悪、天理にそむける所なり。孟軻有レ言『知レ命者不レ立二于巖牆之下一。尽二其道一而死者正命也。桎梏死者非二正命一』（孟子）と云々。これを以て見れば義貞豈道をつくしたる正命の死ならんや。孔門の高弟子路が死二于衛（二）、子羔が不レ賫不レ徑は、過不及の弊あり。聖人微服して、宋を過給ふ。中庸の理をしらば、義貞賫し徑して命を全して天下の功をいたさるべきを、血気の勇を事としたまふ故に匹夫の鏃にあたり、横死せられし事、言語道断の不義也。…」

京都から援軍を請う勅宣を受けつつも北国にとどまった義貞は、遂に敵に囲まれて最期を迎える。為信は、義貞の戦死に至るまでの戦いぶり、計略についてもあわせて論じ、特に「血気の勇」を持つ義貞の器量に焦点を当てている。京都に上らず北国にとどまったこと、敵に背後を突かれるような挙に出たことなどの計略上の失敗、また天下を左右する武将の身でありながら、自分の命を軽く扱う行動をとり死に至ったことなど、全ての失敗を義貞の器量「血気の勇」に一括して「理を背れし事一ならず」・「此三失は義者の所レ悪、天理にそむける所なり」・「言語道断の不義」と批判しているのである。ここでも、先の義経の例と同様に「理」・「義」という語が用いられている。そして「理」・「義」の説明に『孟子』が引用され、大将の立場にあって功を成し遂げねばならない者が軽々しく死んではならないと論されている。(注21)

義経と義貞の二人の大将の例を見てきたが、為信が殊更「勇」を非難することは、「勇」を持つ大将が「理」や「義」に背いているということに起因していると考えられる。その「理」は、特に大将の身命が勝敗に関わる重大事だということを内容として持っているといえるが、義貞の例に見られるように計略に関する事柄も「理」と表されるようである。そして「理」・「義」を説明する際、『論語』や『孟子』といった儒書が引用されていることから、為信は、儒学から得られる「理」・「義」を守ることを大将に求めていたと考えられる。また、大将の命が重大事だということを「理」とし、その「理」に反して命を軽んじ死に及ぶことを「不義」とする、「理」・「義」という語の使い方は、朱子学で「理」・「義」が体用の関係で結ばれていることと図式において符号する。(注22)「理」に反する「勇」を批判する姿勢には、為信の儒学が不可分に関わっているのである。

為信は、「勇」を、「理」を解さないこととして批判している。一方「智」は、すなわち「理」を解することだったと推測される。為信は、計略を立てるときの前提となる「智」の徳を持たせるため、大将に儒学の学習を要求していたのではないだろうか。

## 五

大将に対する論評において、器量の点で特に欠陥の無い大将でも問題となるのは計略の良し悪しである。大将の用いた一々の計略について為信はきわめて詳細に論じている。

為信が良策と認める計略とはどのようなものだったのだろうか。

合戦の要、人数の多寡・地形の利・敵の虚実・味方の一致を謀時は、勝負前方にあらはる。是故に孫子曰「識二衆寡之用一者勝。知レ彼知レ己百戦不レ殆。不レ知レ彼知レ己一勝一負」と云々。[巻五⑪]

「合戦の要」として、計略を立てる際に当然ふまえるべき事柄が「人数の多寡」以下四つあげられている。「人数の多寡」は敵味方の

軍勢の数、「地形の利」は戦場の地形が自軍にもたらす利点、「敵の虚実」は敵の備えが甘いところと堅いところ、「味方の一致」は味方同士がよくまとまって行動することである。[注23] これらに合わせて計略を立てることが大将に求められていたのである。[注24]

実際の「評」を見ていくことにする。次に掲げるのは、越中国の砥浪山において、平維盛・通盛が率いる七万余騎と木曾義仲の五万余騎とが相対した合戦についての論評である。

或問「…此軍、平家大勢たりといへども行なく敗北せり。平家はいかなる行を以勝利に成べく候や。」

答て云「平家謀拙きゆへにかくのごとし。『孫子』始計の篇に、軍を起さんとならばかねて五事七計をもつてはかれとあり。五事とは道と天と地と将と法と也。平家方には此五の理を得ざる中にも第一地の利を得ざる也。地と云は遠近険易広狭死生の地のわかちあり。かくのごとくの悪所へ人数を押入るほどならば、近辺の地形の険易をはかつて陣をとるべき事ならずや。其所の案内者を求め、山路険阻樵夫の通路までたづね極めて、つまり〳〵に人数を備置なば、かくのごとく敗北には及ばじ。孫子が『不レ用二郷道一者不レ能レ得二地利一』といへるはこゝ也。…」[巻二⑤]

比較的大勢であったにも拘らず敗北した平家方の計略が批判されているが、その批判は特に計略に「地の利」（地形の利）がふまえられていなかったことに集中している。ただでさえ大勢が動きづらい山中の合戦において、「地形の険易」に沿って陣を張らなかったことを平家方の敗因と指摘し、もし土地の案内者（郷導）に地形を詳しく尋ね、それに合わせて陣を取っていれば敗れることはなかったと述べているように、「地の利」に適った計略であるかどうかがこの論評の主旨となっている。ここで注意しておきたいのは、「地の利」を含む「五事」すなわち「道と天と地と将と法と」が、「五の理」とも表されていることである。為信は、計略上の問題である「地の利」を「理」としてとらえているのである。[注25]

もうひとつ例をあげる。藤井寺に陣取った細川顕氏の虚を突いて、楠正行が勝利を収めた合戦についての論評である。

或問「…此合戦、油断の事は云におよばず。楠即時に押よせ、不意を打しは、勿論勝利を得しかども、同じくは又藤井寺に敵着陣せば夜討にするか、又は途中にて打ばよからんか。京勢軍は明日か明後日ならんと油断せしかば大将を打取事もあるべし。此理いかん。」

答て云「正行が合戦理に当れり。尤中途の地形を見立、かねて伏兵を置、敵の来る中途を不意に打なば、一利有べし。しかれども京勢いまだたゆめる気なく、用心の体にておしきたるなれば、藤井寺にて帯紐をときたる所を打たるよりは利すくなし。又夜討のこと一理有といへども、夜に入なば敵陣近ければ

京勢も少は用心なくてはあらじ。しかれば白昼なりとも、帯紐をとき、休める所を打たる事、理において勝れり。されば古人有レ言「攻二其無レ備出二其不意一」（孫子）といへり。小勢を以て大敵を拉ぐ事夜討にしく事なしといへども、又時の品により敵の虚実をよく見て昼夜にかぎらず合戦する事よし。…」［巻五⑨］

楠方に想定される計略、すなわち細川勢が行軍する途中を討つか、夜討ちをするか、敵が着陣してひと息ついたところを討つかという三つの計略を比較対照し、敵の着陣時に討ってかかる計略を最良と評価しているが、その評価基準となっているのが「敵の虚実」である。行軍時・夜間・着陣時のうち、細川勢が最も「虚」無防備さを見せたのが着陣時であったことから、楠正行が実際に用いた三つ目の計略を高く評価しているのである。そしてここでもやはり「帯紐をとき、休める所を打たる事、理において勝れり。…時の品により敵の虚実をよく見て昼夜に限らず合戦する事よし」というように、「敵の虚実」が「理」ととらえられている。(注26)

「地の利」と「敵の虚実」とは、論評において重要な位置を占めていることが確認できる。そしてともに「理」という基本的な概念に収斂されるのである。その他にも「東国勢六万よきにて責上るに、木曾わづか二千騎に不足の勢を以て可レ勝やうなし。此理を得心せば…」（巻二⑧）のように「人数の多寡」を「理」とし、「「天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一」」（孟子・司馬法）と云り。此理をしらず、天の時になづむ事、あさましき事也」（巻四⑦）のように「人の和」すなわち「味方の一致」も「理」としており、先に為信が計略上のふまえ所としたものとして確認した四つ全てが「理」に統括されるといえる。(注27) つまり為信は、計略の良し悪しを「理」に適っているかどうかで判断していたのである。

その「理」は、為信の兵学のあり方を規定していると思われる。為信は、和漢の兵書について論じるなかで次のように述べている。

軍法は、漢書よりおこる時は是本也。其漢書の理を見得して和朝の名人作為する書なればあしきにはあらず。人の器用によりて、漢書を見て理に通達する人もあらん、又和書を以て得道の人もあらん。しかれども漢書にて理を得る事十にして八九、和書にて理を得る事は十にして二三ならん。本末始終を工夫し軍権転変万化の理においては漢書にて知、軍術の業にいたりては和書にて学び、漢和兼備てしかるべからんか。［巻七⑪］

漢籍の兵書（『孫子』などの七書）を「軍法」（兵学）の基本とするべきことを主張しているが、「漢書の理を見得して」・「漢書を見て理に通達する」・「漢書にて理を得る事」・「軍権転変万化の理においては漢書にて知」というように、兵書の学習の根底にあったのは「理」を得ようという態度であった。為信の兵学は、「理」を根底に置いてその上に成り立っていたと考えられる。

## 六

以上、大将の良否ということを軸として展開する「合戦の評」の検討を行ってきた。器量から計略に至る諸相を追うなかで明らかになったのは、為信が大将に対して一貫して求めていたのが「理」であったということである。大将にはまず「理」を解する器量が求められ、その次に「理」をふまえた計略を立てることが求められたのである。そして「理」は、器量では儒学、計略では兵学に依拠するものであった。もっとも「理」といえば朱子学の根幹を成す概念であることは勿論で、それは為信の儒学においても同様であろうが、為信は儒学の「理」を兵学に援用しているのである。

『軍理問答』の最後の「合戦の評」となる巻七⑩では、武田勝頼の戦死についての論評のなかで勝頼の「匹夫の勇」が批判され、あわせて大将が普段から心懸けるべきことについて、次のようにまとめられている。

鑓兵法は一騎侍の業にて、大将の業にはあらず。しかれども一向に捨よと云にはあらず。万事本末始終あり。大将たる人の急務本始は文学を宗とし、修身斉家治国平天下の法をしり、扨又「治にも不レ忘レ乱を」（武家諸法度）といへば、軍法を修行し、戦場にて人数のさし引損徳を察見する事尤也。文学軍法を修行有て余力あらば、又鑓兵法のわざもけいこ有べし。扨こそ孔子「物有二本末一。事有二終始一。知レ所二先後一則近レ道」（大学）と云。後将慎レ之。

ここには、鑓などの武芸の鍛錬は後回しにし、為政者としてまた一軍の行動の指針として身をなすための修養を先に行うべきことが主張されているが、その修養の中身が「文学」儒学と「軍法」兵学の習得なのである。儒学からは「修身斉家治国平天下の法」身の修め方から治政の術までを、兵学からは「戦場にて人数のさし引損徳」すなわち合戦の技術を、それぞれ学び取らなければならないという。為信は、大将の立場にある者に儒学と兵学を兼ね備えることを求めていたのである。身の修め方は器量に、合戦の技術は計略に対応すると考えられる。ここでは「文学軍法」と並列されているが、器量が計略の前提になっているように、儒学の習得が兵学を学ぶための条件になっていること、そして儒学の「理」が儒学と兵学を結び付けていることは、既に見てきたとおりである。

兵学の基礎に儒学の「理」が存することは、為信のもうひとつの軍書『闕疑兵庫記』において確かめることができる。この作品にも大将の計略に関する記述のなかに「理」の用例が数多く見られる。

戦場ニヲイテハ、謀ヲ廻ラシ、勝事ヲ千里ノ外に決スルヲ本トス。謀理ニ当リナバ、降人ニ出ベキ事何ノ害カアラン。理ヲ尽シテノ上ニ敵ノ摘ニナリ死ニ及バヾ、何ノ後悔カ有ベキ。「見レ義不レ為無レ勇」（論語）ト古人モイヘリ。謀略理ニ叶ヒ

タル上ニモ若モ敵ノ摛ニヤナラント思フハ、猶予狐疑ノ心トテ、義者ノトラザル所ナリ。[巻上「敵四方有事」](注28)

大将は「理」に適っているどうかで計略の成否を占うべきであるという主張は、『軍理問答』における計略の記述と軌を一にしており、兵学に「理」が密接に関わっているといえる。そしてその「理」を解するということが儒学に根ざしたものであることは、「見レ義不レ為無レ勇」という「古人」(孔子)の言葉の引用や、次の例が示す。

夫天地ノ間、人間・畜類・鳥類・草木、有情・非情、皆一理ヲ以テ成就ス。一箇ノ理アキラカナラバ、天地ノ間何事ヲカ疑ンヤ。然ラバ則人タル者ハ理ヲ尽シ知ズンバ有ベカラズ。理ヲ知ン事ヲ欲セバ、文学ヲ以テ致知格物ノ修行急務ナリ。…人トシテ事物ノ理ヲ知ズンバ、人面心獣トテ、形チハ人タリトモ、心ハ鳥獣ニ同ジ。是ヲ以テ見レバ、上君ヨリ下万民ニ至ルマデ、文学ヲ先トシ、事物ノ疑ヒナカラン事ヲ欲シ願フベキ事ナリ。カリソメニモ心ヲユルガセニ持事ナカレ。

[巻上「五運事」]

天地間の万物は「一箇ノ理」から成立しているのであって、人としてはその「理」を知るために「文学」儒学を学ばねばならないと述べている。(注29) 兵学は儒学の「理」によって支えられたものである。兵学から儒学を切り離すことはできない。「理」がしっかりと結びとめているのである。

## 七

本稿では、これまで殆んど等閑に付されてきた為信の軍書のうち『古今軍理問答』を取り上げて、為信の思想について考察を行った。この作品の検討から浮かび上がった大将に求められる「理」、そして「理」によって繋ぎ合わされる儒学と兵学は、そのまま為信の思想の枠組みとして考えてよい。それは、例えば『山水十百韻』に「儒俳諧」と題する百韻と「兵俳諧」がともに収められていることからも明らかである。為信の思想において、儒学はやはり特筆されるべきものであった。しかしその儒学は、儒学と兵学という枠組みのなかに存するものなのである。今後は、その枠組みをふまえて、ひとつひとつの著作の検討を十全に行う必要があろう。その作業の出発点に本稿は位置する。

注

(1) 『新版日本近世文学の成立―異端の系譜―』(法政大学出版局、一九七二年八月、以下『新版』)所収。初出『国語国文』第二十一巻第六号(昭和二十七年六月)。後に『日本近世文学の成立―異端の系譜―〈叢書日本文学史研究〉』(法政大学出版局、一九六三年十一月)所収。本稿では『新版』を参照した。『漂泊野人』は、『理非鑑』・『古今軍理問答』に見られる為信の筆名。

(2) 下坂氏は江島家伝来の資料を精査され、筆跡、出身地の飫肥との交流、今治藩への仕官の経緯などの点から、為信伝の再考を進められている。

その成果は、「江島為信の仕官事情とその背景―寄託資料「江嶋家文書」報告を通して―」（『愛媛国文と教育』第三十六号、平成十五年十二月）に発表されている。

（3）為信の学んだ太田道灌持資流の兵学は、飫肥または薩摩に伝来したものと考えられる。服部正弘編『今治拾遺』（明治二十七年成立、今治城管理事務所蔵）十六之巻下「持資流兵学師範」に為信の師として記された「伊東内膳入道玄亀」は、『清武川崎氏家譜』（宮崎県立図書館蔵）に川崎兵右衛門尉祐豊の子として載せられた「伊東内膳正祐富改蘇庵玄亀　京都住」と同一人物であろう。『河崎私記』（日南市立図書館蔵）によると、この人物はもと島津家の家来であったが禄を返し、京に住んで医業を営んだという。以上は長友禎治氏の御教示による。なお日南市立飫肥城歴史資料館に「持資流軍法印状」が蔵されているが、そこに玄亀・為信の名は無い。

（4）注1所掲の松田氏稿は、『身の鏡』と『理非鑑』について「ともに排仏崇儒の立場で、啓蒙的教訓的仮名草子に属する」とするなど、「儒学の徒」であることを強調している。ただし後に野田壽雄氏が『身の鏡』の作品論（『日本近世小説史　仮名草子編』〈勉誠社、昭和六十一年二月〉第四章第二節）において「兵法や儒学を勉強したらしいが、『身の鏡』で見るかぎり、兵法や儒学の押しつけは無く、また松田氏の言う排仏論も見られない」と修正され、あわせて「著者は、穏健な常識家であったようである」と規定されている。また渡辺憲司氏の『身の鏡』の解説（『新日本古典文学大系74　仮名草子集』〈岩波書店、一九九一年二月〉所収）でも、「巻上の一は『大学』を踏まえ、本書の基本的姿勢を示している。しかし他の章における『論語』『孟子』等の引用と同様にこれをもって儒教的合理主義者といった評価を下すことは当っていない。彼は常識的教養主義者とでも言えそうな位置に居る」と野田氏と同様に評されている。

（5）『理非鑑』については、拙稿「江島為信『理非鑑』の位置」（『鯉城往来』第六号、平成十五年十二月）で詳細に論じる。

（6）所見の伝本は、改題本を含め、以下の三種に大別される。

Ⅰ寛文五年刊本A（「凡例」あり）

▽国立国会図書館所蔵本（請求番号、134・6・22）

大本七巻三冊（巻一第二十丁および巻二を欠く。巻一と巻三、巻四と巻五、巻六と巻七を合綴。改装。内題「古今軍理問答」。柱題「軍理問答」。「凡例」・漢文序・漢文跋あり。跋末「日州宮崎郡清武之産／漂白（ママ）野人記之」。刊記「寛文乙巳年八月吉日／絵双紙屋喜左衛門板行／之」。

Ⅱ寛文五年刊本B（「凡例」なし）

▽宮城県図書館伊達文庫所蔵本（請求番号、伊399・コ13・7）

大本七巻七冊。原題簽は全て剥落。Ⅰに存する「凡例」なし。内題・柱題・漢文序・漢文跋・刊記はⅠと同じ

▽京都大学附属図書館所蔵本（請求番号、8―21・コ・1）

大本七巻七冊。題簽は全て後補。構成は同右。

▽萩市立図書館所蔵本（請求番号、七乙1―5）

大本七巻七冊。全冊の原題簽が存し、子持ち枠中に「古今軍理問答一（～七）」とあり。構成は同右。

Ⅲ元文二年刊改題本（「新板／絵入／諸将勲功記」）

▽京都大学附属図書館所蔵本（請求番号、8―21・シ・5）

大本七巻七冊。巻一・巻七は改装。巻二～巻六には原表紙・原題簽が存し、子持ち枠中に「新板／絵入／諸将勲功記二（～六）」とあり。内題「諸将勲功記」。柱題「軍」。Ⅰに存する「凡例」なし。Ⅰ・Ⅱの漢文序のかわりに和文の「諸将勲功記序」あり。「諸将勲功記目録」あり。漢文跋あり。跋文中ⅠⅡが「古今軍理問答」とする箇所

を、「諸将軍理問答」と入木訂正。刊記「元文二年巳正月吉日／林氏甚助板」。

寛文五年刊本に二種存するが、Ⅰには「凡例」が備わり、版面の状態も比較的良好で、諸本中最も初刷に近いものと思われる。したがって本稿では、Ⅰの国立国会図書館所蔵本を主に用い、不足の巻一第二十丁と巻二をⅡの伊達文庫所蔵本で補った。引用に際しては、現行の字体に従って翻字し、助詞を表す「社（こそ）」・「共（とも・ども）」などは仮名に改めた。また仮名の濁点・句読点・カギ括弧・改行を施した。ルビは適宜省略、補足した。補った場合は（　）で囲んだ。原文の不審箇所には右傍に（ママ）を付した。引用文中、（　）内の注記と傍線は全て引用者による。引用者による省略は…で示す。

(7) 「理」・「義理」・「天理」・「軍理」・「本理」・「実理」・「深理」・「妙理」・「理運」・「理非」・「一理」・「非理」・「無理」をあわせると、用例数は百七十二にのぼる。

(8) 底本のルビ「もど」。先行作品と自作の差異を主張する文脈を考慮に入れ、「もと（る）」と訓じる方が解しやすいと判断した。

(9) 「凡例」には記されていない軍記物が出典となっている章も若干存する。巻一⑧には、『源平盛衰記』巻第二十に載せられる源頼朝の石橋山合戦の記事が取り上げられている。また巻七の跋前の二章にはそもそも合戦記事が引用されておらず、ひとつには和漢の兵書、もうひとつには和朝の兵学諸流派に対する為信の見識が記されている。なおその跋前の二章により、為信が漢籍の兵書を基本とし、太田道灌流に属しながらも兵学の流派にはこだわりを持たなかったことが知られる。

(10) 合戦記事の引用が無い跋前の二章（巻七⑪・⑫）においても、同様の問答体が用いられている。

(11) 注7に記した「理」の用例数は、合戦記事の引用部分を除く「或」の質疑と、「答て云」以下の記述から数え上げた。「或」の質疑には五十四、「答て云」以下には百十八の用例が見られる。

(12) 巻四⑧では、朝廷の加護に関して、次のような問答が交わされている。

　　或問「此合戦、勢の多少を以て見れば誠に十倍せりといへども、戦のたび毎に利をうしなふは、尊氏朝敵たるゆへなるか。」

　　答て云「しかはあらず。将の謀つたなき故也。智謀かね備らば、いかでか義貞の小勢にかけ立られんや。…」

(13) ただし巻一⑤で論評される渡辺源三競、巻三③の児島高徳、巻二⑨の熊谷直実・平山季重、巻六①の石堂頼房は、大将ではなく家来の立場にある人物である。しかしこれらの人物についても、暫時の大将に準ずる働きや、大将に対する忠、大将の定める軍中の法度に違反したことなどが問題となっており、合戦の勝敗を大将に帰する考え方との矛盾は無いと思われる。

(14) 士卒の役割については「凡そ軍（いくさ）は一進一退皆大将の下知にしたがふを以て勝（かち）を取（とる）也」（巻二⑨）・「士卒大将の手足耳目のやうなる時は、小勢たりとても大敵を拉（とりひし）ぎ、強陣を破る事なきにしもあらず」（巻四⑤）などの記述を参考にした。

(15) もっとも大将は、平時には為政者として存在する。そのことは「官軍幾千万も有中に大将の命にかはる侍只一人有（あり）事は、大将の平日士卒をあはれむ心うすく、政道悪敷（あしく）が故にあらずや」（巻四⑪）などから窺える。

(16) 底本のルビ「かご」。誤刻と思われるため訂正した。

(17) 『軍理問答』において「古今無双の大将」（巻三②）と最高に評価されている楠正成は、一方で「智者」・「智謀」（巻三⑤）とも評されている。この人物が為信に与えた影響も論じるべき問題である。『太平記評判秘伝理尽鈔』との比較とあわせ、別の機会に詳細に述べたい。

(18) 義仲や細川清氏の他にも、「勇」の持ち主と評された大将に、源為朝・

源義衡・大場景親・矢田義清・源行家・源義経・赤松則祐・新田義貞・菊池武光・村上義清・武田信玄・板垣信形・武田勝頼らがいるが、大抵論難されている。

(19) 「智仁勇」など三徳が組み合わされて用いられている場合があるが、それは数に入れていない。

(20) 「暴虎馮河」は、楠正成が新田義貞に語った言葉のなかにも引用されている（『太平記』巻第十六）。為信が「暴虎馮河」をさかんに引用していることには正成の影響が考えられるのだが、正成の為信への影響については改めて論じる。

(21) 『孟子』にもとづく岩壁の譬えを用いた記述は、『理非鑑』下「武勇の事」にも見られる。「自然は、又少左衛門（曲渕少左衛門）ごときの不儀の小勇も一生無事にて命を終るもあれども、こまれ幸とて不慮のことなり。崩れんとする石壁の本に立がごとし。我道（儒道）の大勇は是にはあらず」（『近世文学資料類従仮名草子編25　身の鏡・理非鏡』〈勉誠社、昭和五十二年六月〉による）。岩壁の譬えも、「暴虎馮河」とともに、為信の「勇」に対する批判を支えたものということができる。

(22) 『北渓先生字義詳講』（山脇重顕校点、銅鉈坊書肆村上平楽寺、寛文八年三月刊）に「理与レ義対説ハ、則理是体、義是用。理是在レ物当然之則、義是所三以処二此理一者。故程子曰、在レ物為レ理、処レ物為レ義」（佐藤仁氏解題『北渓先生字義詳講　朱子行状　朱子年譜』〈広文書局有限公司、中華民国六十一年五月〉所収の影印による。合符は省略した）と説明されている。為信が「理」と「義」をあわせて用いている記述は、他にも「天下のために重かるべき大将の身として死をかろくする事は不義なり。命を全すべき理にあらずや」（巻五⑥）がある。

(23) 類例として、「敵の位・地形の品・人数の多寡によつて備をくばる事法也」（巻六②）があげられる。

(24) もっとも計略を立てる上で問題となるのはそれらが全てではない。「人数の多寡」以下の四つは飽くまでも典型的なものである。

(25) 「地の利」を「理」としてとらえていることが分かる記述は、他にも「軍理をよく弁へ、敵情・地の利を知なば、理の外の長詮義何ぞ用るにたらんや」（巻一⑥）がある。

(26) 「敵の虚実」を「理」ととらえている記述は、他に「『如二以レ碓投一レ卵』（孫子）とは至実を以て至虚を打所の理也」（巻二⑫）がある。

(27) 他にも多くの事柄が計略上の問題となっているが、それらも「理」と表されていることが多い。例えば「矢田判官軍理をしらば舟軍をばすまじき理也」（巻二⑥）・「根本此城の用意理にかなはず」（巻三⑤）・「又松浦軍理の妙をしらば敵間を此方へ用る理あらん」（巻六⑥）などである。

(28) 引用は、萩市立図書館所蔵本（請求番号、七乙1―23）による。以下同じ。

(29) 注1所掲『新版』に、この記述が引用されている。松田氏は、引用にもとづいて「為信は屢説のごとく道灌流の軍学者であるとともに儒者であった。軍学も畢竟経世済民の方途として解していたのであって、この立場から為信はなににもまして『文』を重んじていた」（『新版』百九十七頁）と述べられているが、「理」の問題には踏み込んでおられない。

【付記】

本稿は平成十三年度広島大学国語国文学会秋季研究集会における口頭発表に基づき加筆してまとめたものです。発表の席上ご指導を賜りました諸先生方、また資料の閲覧に際してご便宜を頂きました管宗次先生・長友禎治先生・各所蔵機関に心より御礼申し上げます。

―おくい・やすまさ、本学大学院博士課程後期在学―